

開催地名：長野県岡谷市	
開催日時	令和2年1月18日（土） 10：00～12：00
開催場所	諏訪湖ハイツ
語り部	菅井 茂 （宮城県仙台市）
参加者	岡谷市自主防災組織（21組織）、市民 約60名
開催経緯	自主防災組織を中心に防災・減災活動を実施しているが、組織役員の災害に対する心構えや危機管理意識にバラつきがあるのが現状である。今回、語り部の講演を行うことで、防災意識を高めたいと思う。
内容	<p>（1）大震災発生時の状況</p> <p>私は、県内にある鳴子温泉での打ち合わせを終えて自宅へ帰宅する際に、大きな揺れに遭遇した。「これはただごとではない」と感じ、すぐに地元へ連絡をとろうとしたが、電話は携帯電話も含めて全て不通となっていた。連絡する手段が全くなかったため、停電で信号機が全て止まっている中を細心の注意を払って、何とか地元へたどり着くことができた。</p> <p>帰宅後、自宅がめちゃくちゃな状態だということは予想していたが、一番気がかりだったのが、地元地域の安否だった。直ちに最寄りの南材木小の避難所へ駆けつけて、町内会連合会長の立場から地元地域被災者の受け入れと、津波によって行き場を失った他地区の被災者の受け入れに奔走することとなった。</p> <p>（2）避難所に詰めかける人々</p> <p>20時の時点で、水と乾パンを全員に配った。そのとき、905名が避難して来ていることを確認した。避難者数は最終的には1,200名になった。仮設トイレを北側に設置したが、寒いので皆使用しなかった。そのため、急いで東側に作り直した。また、自家発電機は2基あったが1基は作動しなかった。日頃から定期的にチェックしておく必要があると痛感した。</p> <p>11日の夜、避難所運営委員会を立ち上げ、役割を分担し、ボランティアを募った。その結果、若い人が寝ないでトイレの番をしてくれるなど、トラブルもなく運営できた。避難所の起床は6時半、朝食が8時、それから夕食を17時に設定して準備した。地区内で倒壊家屋はなく、水が出ないだけだったので、昼食については用意せず、帰宅して食べてもらうようお願いした。また、あらかじめライフラインが復旧したら帰ってほしいと伝え、10日後の3月21日には速やかに帰宅してもらった。</p> <p>（3）避難所運営がスムーズだった要因</p> <p>13日からは、私は八軒中学校の避難所へ行った。こちらには460名の避難者がいた。避難所は避難した人たちのホームである。地区の代表者が、自分の地区</p>

の住民から希望や不満を募った。そして、避難者に対して、避難所での決まりごとを周知して、実際にそれらを遵守してもらったことが、トラブルもなく快適に運営できた要因ではないかと思う。具体的には、避難所内は、「禁酒」、「禁煙」とした。そして、食事を提供する時間（1日2回）、起床時間、消灯時間、館内放送を使用する時間等の1日のスケジュールを明確化した。

避難所運営がスムーズにできたことには他にも要因があった。まず1つは、平成17年から、地域で総合防災訓練を実施していたことである。平成19年からは避難所となった八軒中学校とも連携し、同校で防災訓練を行っていた。東日本大震災の2日前にも、同年の防災訓練について打合せをしたばかりで、避難所を開設したらどう動く、ということが頭に入っていた。さらに、地区の昔からの住民とマンション住まいの新住民が、小学校の諸行事を通じて顔見知りになっていたことも大きい。行事というのは40年以上も続く夏祭りや運動会であるが、こうした場は地域の人が交流する良い機会になる。

(4) 課題と新たな取組

しかし、課題も明らかになった。災害対策本部に住民の安否確認を報告しない町内会長がいたのだ。以来、震度6以上では必ず報告することとした。

また、総合防災訓練をさらに強化することにし、地域が主体となり、各学校と協力して実施することになった。訓練の日には、南材地区自主防災連合会だけでなく、小・中学生、仙台市の職員、警察官、水道局や消防署の担当者、NTT東日本や病院関係者など多くの人々が参加する。地域防災に関しては、公的なものはなかなか期待できない。まず自分で自分のやるべきことをし、それからお互い助け合う。そのためには、常に地域で顔の分かる関係をつくっていかないといけない。向こう三軒両隣というのが、町内会及び地域防災の基本だと思う。



開催地より

スムーズな避難所の運営についてのお話はとても参考になった。直ちに同じようなシステムを作ることは難しいと思うが、避難する各町内会や自主組織防災間の連携はすぐに始められると思うので、まずは始められることから始めていければと強く感じた。